

# 生ける水

聖霊による刷新のために

2025

冬季号

No.155

## 世界の果てから果てまで

カリス国際コムニオ奉仕会モデレーター ピノ・スカフォーロ  
カリスニューズレター二〇二四年クリスマス号より

キリストに結ばれている兄弟姉妹の皆様へ  
カリスの使命の一つは、「恵みの潮流」  
を通して聖霊が世界にもたらすニュースを  
共有し、家族として共に喜び、互いに励ま  
し合うことです。今回カリスがお届するニ  
ューズレターには、聖霊による刷新のさま  
ざまなグループや共同体が主からインスピ  
レーションを受けて信仰と兄弟姉妹への奉  
仕を深めるために行なったことの事例がい  
くつか紹介されています。これらを読んで、

より多くの人々がイエス・キリストとの個  
人的な出会いを経験できるようにするため  
です。これらは確かに皆さんの信仰を新た  
にし、また、皆さんがそれぞれ置かれてい  
る場所で使命を展開するためのインスピレ  
ーションと力を受け取ることもつながる  
でしょう。  
二〇二四年十一月十二日から十五日まで  
ローマでカリス国際コムニオ奉仕会の会議  
が開催されました。この会議で聖霊は、預



### ☆ 目 次 ☆

世界の果てから果てまで (ピノ・スカフォーロ) .....	1
「聖霊生活セミナー」が新しくなります .....	2
昨日も今日も永遠にキリスト (小熊晴代) .....	4
「祈りの集い」における賛美・感謝・礼拝について (秋元伸介) .....	8
石川師の黙想会報告と新年度の予定 (小松多佳子) .....	10
日台ユース・カリスグループの 合同黙想会開かれる .....	11

発行  
聖霊による刷新  
全国委員会

編集委員  
中村友太郎  
益田 薫

購読料(送料込み・年1700円)

購読申込み・振込み先

〒141-0021  
東京都品川区上大崎2丁目  
10-34-2-312  
聖霊による刷新全国委員会  
Email: ccrjapan@mlist.ne.jp  
郵便振替 00190-1-18878  
口座名 聖霊による刷新全国委員会

言やメッセージを通して非常に力強く私たちに語りかけ、教皇フランシスコからカリスに託されたビジョンと使命を果たすためのさまざまなプログラムやプロジェクトを計画するよう導いてくださいました。

以下は、二〇二五年聖年のイベントを含む、世界的なカトリック聖霊による刷新のために計画された重要なプロジェクトやプログラムの詳細です。

- 司祭、牧師、司牧者の集い、3月31日～4月4日
- 預言的執り成し訓練コース、3月31日～4月4日
- 祈りの集いグループのための聖霊による刷新世界大会、4月4日～6日
- 聖ペトロ大聖堂で聖なる扉からの入場と教皇フランシスコとの謁見、4月3日（右記の3イベント共通）
- 聖霊による刷新に関心のある

## 「聖霊生活セミナー」が新しくなります

カリスニュースレター二〇二四年クリスマス号より

司教の集い

● 聖霊降臨に備える聖霊による生活セミナー、「新たないのち + (New Life+)」

● アジェンダ二〇三三の諸活動

● リーダーシップ訓練コース

● 霊の賜物「カリスマ」学校

● 執り成し訓練コース

カリスの各担当チームは、要請に応じて大陸および邦レベルでこれらの訓練コースを物理的に組織する準備ができています。私たちカリスは、支援してください

さる皆様に感謝し、これらのイベントをぜひ促進していただくようお願ひ申し上げます。また、使命を続行するための祈りのサポートもお願ひ申し上げます。

カリス事務局で自分の机に向かい、上記のイベントや今後のイベントを企画し準備するにつけ、カリスが直面している最も重大な問題は、世界規模のカトリック聖霊による刷新に対する

私たちの使命と奉仕を支えるために必要な資金を見つけることだと痛感します。出費を最小限に抑えるために最善を尽くしているにも関わらず、カリスは運営維持の財源を見つけるのに苦労しています。ご存知のように、

カリスの主な収入源は、各国のコムニオ奉仕会、契約共同体、ミニストリー団体、祈りの集いグループ、賛助者、支援者から受け取る十分の一献金を含む

自発的な献金です。このクリスマスに私たちから特別なお願いがあります。各国のコムニオ奉仕会、契約共同体、ミニストリー団体、祈りの集いグループ、そして読者の皆さんが個人として、カリスへのクリスマス・プレゼントとして献金し、私たちがこの重要な使命を続行するのを助けていただきたいのです。

献金は、カリス事務局の住所 (Palazzo San Calisto, Piazza di Palazzo San Calisto, Piazza di Palazzo San Calisto, Piazza di Palazzo San Calisto) 教皇フランシスコは、聖霊による洗礼の体験を誰とでも惜しみなく分かち合うことは必要であり、聖霊生活セミナーは重要

San Calisto 16, 00153 Rome, Italy)

に小切手を郵送するか、インターネットバンキングを通じてカリスの銀行口座に送金するか、PayPal、UPIなどを通じてクレジットカードでお支払いいただけます。

詳細は、<https://www.charis-international/en/contribute/>をご覧ください。

神の言葉は私たちに勧告していません。「各自、いやいやながらも心を決めたとおりにしなさい。喜んで与える人を神は愛してくださるからです」(二コリント9・7、聖書協会共同訳)。私たちは、あなたの寛大で犠牲もいとわない愛の献げものに前もって感謝し、あなたの意向のために私たちが祈ることをお約束いたします。祝福されたクリスマスと、聖霊に満ちた新年二〇二五年をお祈り申し上げます。

二〇二三年十一月三日にバチカンのパウロ六世記念ホールでカ

リス主催の国際イベントに参加した人々との謁見でこれを強調されました。

聖霊生活セミナーのメソッドは秀逸であり、五十年以上にわたり世界中で何百万もの人々に実を結ばせてきました。しかし、私たちがこのツールで向き合ってきた世界は年々大きく変化してきたことも事実です。イエス・キリストの必要性は依然として緊急ですが、イエスを宣べ伝える手段は、今日の状況という現実を考慮に入れなければなりません。

これは第二バチカン公会議の勧告ですが、はるか以前に聖パウロも当時の異なる文化に合わせて福音の伝え方を適応させていました。福音の本質は変わらず、変える必要はありませんが、今日の人々のニーズに効果的に応じる必要があります。カリスは、この聖霊生活セミナーという素晴らしいツールの更新版を作成するために細心の注意を払って作業してきました。この更新版は恵みの潮流が教会と全世

界に提供できる価値あるサービスだ、と私たちは信じています。

このメッセージは誰に向けられているでしょうか。このプロジェクトの目的は、救い主イエス・キリストと直接個人的に出会うことを通して多くの人々の心が主イエスに立ち帰ることです。カトリック信者であろうと、不可知論者であろうと、グループで集まっても自宅で一人でも、小教区でも学校でも刑務所でもサークルでも友人同士でも、全ての人々が救い主キリストとの親しい出合いを体験することができるよう、この更新版は造られています。

二〇二五年聖年の聖霊降臨に



備えるために、これは最適な手段と言えます。最新版は高品質の視聴覚版で、最初は5言語で提供します。翻訳を希望する他の言語が同じ高品質で使用できるように、公開時期に合うよう事前に資料を提供します。

このプログラムは、カリスの養成プラットフォームにアップロードし、より多くのサポートを提供できるようにします。他の資料、連携、文書、シンクタンクの連絡先などが必要な人々は誰でも私たちの持てる全てを利用し、この機会を利用してカリスのプラットフォームの豊富なコンテンツにより多くの人々が親しめるようになります。

第一回は復活の主日の週に公開され、以後毎週一つのテーマに沿って進めていきます。各週のテーマに関する専門家が30分の教えを担当します。各回には二つの証しが含まれます。一つはテーマに沿った個人的で司牧的な証し、もう一つはキリストに回心した世界的著名人による証しです。また、世界の異なる

文化圏からの音楽ミニストリーもあります。このセミナーは聖霊降臨の主日前晩（今年は六月七日）にクライマックスを迎え、オンラインでライブ配信を行い、聖地、マラウイ、ブルンジ、米国アラスカ州、フエゴ諸島、リオデジャネイロ、ローマなど、世界中のいくつかの都市から中継されます。二〇二五年四月までに準備が整い、全ての人に無料で提供されます。ただし、任意の献金をお願いする予定です。

教皇フランシスコがこのセミナーを推奨しておられるという事実は、多くの小教区がこれをこの聖年に各地域で新しい聖霊降臨の準備となる価値あるツールとして前向きに考えるのに一役買ってくれるでしょう。聖霊による刷新で恵みを受けているすべてのグループと共同体は、このケリグマ、福音の告知があるらゆる教区で二〇二五年の司牧計画に組み込まれるための推進力となることができます。

この新しい聖霊生活セミナー、『新たないのち+』は、さまざま

まな形で実践することができま  
す。たとえば、いくつかの小教  
区やグループが7週続けて土曜  
日に一箇所に集まることを取り  
決め、ライブ配信される全ての

パートをスクリーンに上映して  
一緒に体験してもいいでしょう。  
あるいは、このプログラムを参  
考にし、地元の主催者が教えを  
担当するのもよいでしょう。ま

た、教えはこのプログラムをそ  
のまま活用し、証しと音楽は地  
元の人たちで行う、というやり  
方もあります。自宅やサークル  
会場や学校や刑務所で視聴して

もいいのです。この無料ツール  
を皆さんの地域で促進する手助  
けをしてください。そうすれば、  
他の多くの人々もこの恵みを体  
験することができます。

## 昨日も今日も永遠にキリスト

### ―聖なる扉イエスを通つて―

全国コムニオ奉仕会コーディネーター 小熊晴代

25年に一度の通常聖年が始ま  
りました。次の記事でもお分か  
りのように、私は翻訳校正とい  
う仕事の性質上、インターネッ  
トで嫌というほど検索します。  
言葉の意味や使用例、翻訳する  
原文で引用されている箇所が正  
しいかどうかを極力正確に知り  
たいからです。今回も、日本語  
の「聖年」で検索してみました。  
冒頭にウィキペディアが表示さ  
れ、次にカトリック中央協議会、  
そして次は某大手旅行代理店と  
続きます。昨年二〇二四年六月  
に掲載されたそのページには、  
こう紹介されています。

会の総本山であるバチカン市国  
で、25年に一度しか訪れない「  
聖年」が開催されるのです。「  
聖なる扉」と呼ばれる特別な扉  
が開かれ、世界中から巡礼が訪  
れます。バチカン市国を市内に  
擁するローマは今、観光客の受  
け入れ準備で大忙しです。  
「聖年って何?」 聖年は、大  
赦と呼ばれる罪の免償が与えら  
れる特別な機会として、カトリ  
ック教会が定めた特別な年です。  
神の赦しを得られた者は、大雑  
把に言えば、死後、天国に行け  
るといふことになります。大赦  
にあずかるために信者がやるべ  
きことは色々あるようですが、  
中でもローマに来ないとできな

いとというハードル高めの条件が、  
「聖なる扉 (porta santa)」を  
くぐることに。逆に言えば、聖な  
る扉とは、この機会にローマを  
訪れることで通れる天国への近  
道とも言えます。」  
ですから、ぜひ当社のツアー  
をご利用ください、と誘うこの  
文言、校正者の目には数箇所赤  
ペンを入れたくなる部分があり  
ますが、「通常年」以上に混雑  
と交通渋滞が予想される永遠の  
都に困難をもとめせず、勇  
巡礼者や観光客は偉いなあ、勇  
気があるなあ、と皮肉でも何で  
もなく思っています。冒頭の記  
事でカリスのモデレーター、ピ  
ノ・スカフーロ氏が紹介してい

ます。この無料ツールを促進する手助けをしてください。そうすれば、他の多くの人々もこの恵みを体験することができます。

幸いなことに、ローマの四大聖堂に加えて世界各地の司教座聖堂や指定された教会や聖なる場所を実際に訪問する巡礼、さらに、慈善と償いのわざによっても、神の慈しみと赦しのしるしである全免償を受けることができます。昨年の全国コムニオ奉仕会主催「聖霊降臨二〇二四年全国リレー賛美の集い」で酒井俊弘司教様がビデオメッセージで言及しておられたように、こ

れには、「償いの精神をもって  
少なくとも週に1日、無益な娯  
楽（現実の娯楽とともに、たと  
えばメディアやソーシャル・ネ  
ットワークを通じた仮想の娯楽  
）や過剰な消費を控えること（  
たとえば、教会の一般的な規則  
や司教の指示に従った断食や節  
制のわざによって）」も含まれ  
ます（教皇庁内赦院『教皇フラ  
ンシスコにより発表された二〇  
二五年の通常聖年の間に与えら  
れる免償に関する教令』より）。  
何よりも私たちには、この1年  
間の巡礼を歩むために最適なガ  
イドブックがあります。教皇フ  
ランシスコが私たちに書き送っ  
てくださった大勅書、『希望は  
欺かない』です。

「すべての人にとって聖年が、  
救いの『門』である主イエス（  
ヨハネ10・7、9参照）との、  
生き生きとした個人的な出会い  
の時となりますように」（1）  
と教皇様はこの聖年の目的を明  
記しておられます。

二〇二四年十二月二四日、主  
の降誕の夜半ミサでバチカンの

聖ペトロ（サン・ピエトロ）大  
聖堂の「聖なる扉」を開かれた  
教皇様は、二日後の26日、バチ  
カンから10キロほど西、ローマ  
市郊外にあるレビツピア刑務所  
の「聖なる扉」を開け、希望を  
テーマとする聖年の訪れを受刑  
者たちにも告げられました。バ  
チカンニュースによると、教皇  
様がこの刑務所を訪問したのは、  
聖木曜日の「主の晩餐」ミサを  
「複合施設（通称『新館』）で  
司式した二〇一五年四月と、同  
じく聖木曜日に「女子部」でミ  
サを献げた二〇二四年四月に続  
き、これで3度目です。今回の  
聖年で教皇様が初めて刑務所内  
で『聖なる扉』の開門を行うき  
っかけとなったのは、「聖年が  
始まると言っても、自分たちに  
何か特別なことでもあるのだろ  
うか」という受刑者たちが発し  
た率直な問いを、ローマ教区補  
佐司教でレビツピア刑務所の司  
牧に携わるベノーニ・アンバル  
ス司教が、教皇に伝えたことだ  
そうです。実際、大勅書にも、  
「投獄されている人々に寄り添

う具体的なしるしを示すために、  
わたし自身が、どこかの刑務所  
で聖なる扉を開きたいと思いま  
す。それを、希望と人生への新  
たな決意をもって、未来を見る  
よう招くしるしとしたいので」  
（10）と述べておられます。以  
下、バチカンニュースに記され  
た詳細です。

「このたび聖年の『聖なる扉』  
として教皇が開かれたのは、同  
刑務所『新館』にある『パード  
レ・ノストロ（われらの御父）  
教会』のブロンズ製の扉。教皇  
は外から扉を叩かれ、開いた扉  
からゆっくり入場された。教皇  
に続いて、アンバルス司教と、  
男女の受刑者と刑務官の代表、  
木の十字架を掲げた司祭たちが  
扉をくぐり、聖堂内の中央通路  
を祭壇に向かって歩んだ。その  
両脇の席では、受刑者をはじめ、  
刑務官、改善更生・訓練教育担  
当者ら約三百名がこの入祭を見  
守った。

次いで行われたミサの説教で、  
教皇は『わたしは今日ここで聖  
なる扉を開くことを望みました。

最初に聖ペトロ大聖堂の扉を開  
き、二番目に皆さんの扉を開き  
ました』と話された。

『開く、開け放つ、とは素晴  
らしい行為です。たとえば、扉  
を開くことです。しかし、一番  
大切なのはそれが意味すること、  
すなわち心を開くということ、  
中でも心を希望に向かって開く  
ことです』と教皇は述べ、『希望  
はわたしたちをあざむくことが  
ありません』（参照ローマ5・  
5）と強調された。

教皇は、『希望とは、岸につ  
なぎ留めるための錨（いかり）  
のようなもので、わたしたちは  
ロープで陸地とつながっている  
のです。希望を手放してはなり  
ません。これはわたしたち皆へ  
のメッセージです』、『時には  
ロープが固くて手が痛くなるか  
もしれません。しかし、ロープ  
をしっかり握りしめ、岸を見  
つめてください。錨がわたした  
ちを岸に近づけてくれます』と  
説かれた。

教皇は関係者一同に、素晴ら  
しい聖年と大いなる平安を願ひ、

受刑者らのために毎日の祈りを約束された。」

12月29日の聖家族を祝う主日に3番目に開かれたのは、聖ヨハネ（サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ）大聖堂の「聖なる扉」、1月1日の神の母聖マリアの祭日には聖マリア（サン・タリア・マリア・マジョーレ）大聖堂と続き、最後に、主の公現を祝う1月5日に、聖パウロ（サン・パオロ・フォーリ・レ・ムーラ）大聖堂の聖なる扉が開かれました。

インターネットのおかげで、これらの開門の様子はすべてバチカンニュースが配信する動画でライブまたは再生で見ることが出来ます。実は、我が家ではクリスマスイブにインフルエンザがやって来て私も2日後に感染症が判明、12月29日には所属教会の主日のミサにも地元の司教座聖堂の聖年開幕ミサにもあずかることができませんでした。せめても、と思い、ラテラン教会の聖年開幕ミサにオンラインであずかりました。そして、ブ

ロンズ製の「聖なる扉」に浮かび上がるキリスト像に心を貫かれました。ラテラン教会はローマ教区の司教でもある教皇の司教座聖堂であり、ミラノ勅令でローマの禁教令が解かれた翌年の32年にコンスタンティヌス皇帝により建てられ、「すべての教会の母」と呼ばれています。私の敬愛する福者ペトロ岐部が3年かけてマカオからローマにたどり着き、一六二〇年十一月十五日にローマ教区司祭として叙階されたのはこのラテラン教会だったことを知ってからは、

いっそう親近感を抱くようになりました。聖ペトロ大聖堂や城壁外の聖パウロ大聖堂ほど大きくなく、二〇一七年に私も参加したカトリック・カリスマ刷新50周年記念の開幕ミサがこの聖堂で行われた時には参加者が入りきれず、斜め向かいの教会が聖堂を開放してくれてミサが行われたほどです。ラテラン教会の「聖なる扉」は二〇〇〇年の大聖年に新しく造られたので、その時点では存在していたので

すが、ごった返す人々の中で目を留める余裕がなかったのかもかもしれません。2年後の二〇一九年、カリスが主催した第一回リーダー養成研修会に参加した時も参加者と共に訪れ、当時モデレーターだったジャン・リュック・ムンス氏から説明を受けたはずなのですが、入り口を彩る一枚岩から採取された美しい模様の大理石の壁や聖堂内でエゼキエル書47章を描写するモザイク壁画の写真は撮っているのに、この「聖なる扉」の写真は撮っていないのです。

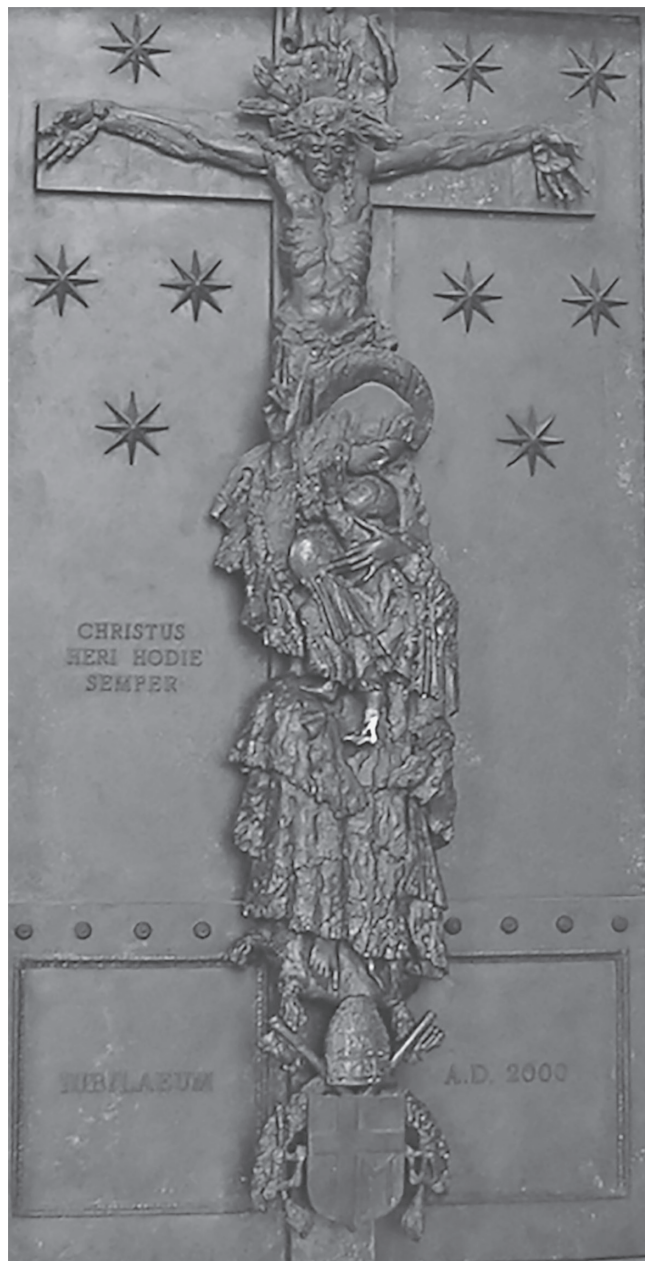
この「聖なる扉」に関して私が集めることのできた情報はとて少なく、イタリア人の彫刻家、フロリアーノ・ボディーニが当時の教皇、聖ヨハネ・パウロ二世の要請で2年半かけて制作し、大聖年の閉幕する二、三週間前に完成した、ということしか分かりません。

こちらで掲載されるモノクロの写真では分かりづらいかもしれませんが、この聖なる扉には、十字架につけられたイエスが

ます。そのイエス様と一体化しているように、足元には幼子イエスを左腕で抱きしめた母マリアがいます。右腕は高く上げられ、十字架につけられた我が子を指差しています。抱きしめられた幼子イエスはマリアの左胸に頬をうずめ、その右胸には、私には肝臓にしか見えないのですが、水瓶から水が流れているようにも見えるし、7つの剣に刺し貫かれる心臓にも見えます。幼子イエスの左足だけ金色に光っています。聖ペトロ大聖堂内の聖ペトロ像の足と同じで、巡礼者が触り続けて青銅色ではなくなったと思われれます。十字架の周りに星が9つ、左側には、

「CHRISTUS HERI HODIE SEMPER（キリスト・昨日・今日・永遠に）」と刻まれています（ヘブライ13・8参照）。この聖なる扉は、大勅書の次の言葉と結びつきました。

「希望はまさしく愛から生まれ、十字架上で刺し貫かれたイエスのみ心からわき出る愛がその根本です。『敵であったとき



ラテラン教会の聖なる扉

でさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子のいのちによって救われるのはなおさらです』(ローマ5・10)。

そのいのちは、洗礼とともに始まるわたしたちの信仰生活の中に現れ、神の恵みに素直にこたえる中で育っていきます。そうして、聖霊の働きによってたえず新たにされ、揺るがな

いものとされる希望によって、いつその輝きを放つのです。旅する教会とたえず歩みをとにし、信じる人々に希望の光を注いでくださるかこそ聖霊です。聖霊は、決して消えることのない松明のように、わたしたちの人生に支えと力を与える、希望の光をともし続けてくださいます。間違はなく、キリスト者の希望は、裏切ることも欺くこともありません。なぜならそ

れは、何事も何者も神の愛からわたしたちを引き離すことはできないという確信に根ざすものだからです。

『だが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましよう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。……しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださいるかたによって輝かしい勝利を

取めています。

わたしは確信しています。死も、いのちも、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高いところにいるものも、低いところにいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです』(ローマ8・35、37-39)。

ですからこの希望は、困難によつてくじかれることはありません。信仰に基づき、愛によつて養われるのです。希望のおかげで、人生を前に進むことができます』(大勅書3)。

私たちを一つにしてください。聖霊と共に、私たち一人ひとりが特別な希望の巡礼者としての聖年の旅を歩むことができますように。

前月号に続いて、昨年8月23日に開催された「祈りの集い研修会」での講話を掲載します。

## 「祈りの集い」における賛美、感謝、礼拝について

秋元 伸介（南山教会）

### 賛美、感謝、礼拝

賛美、感謝、礼拝はそれぞれ異なっていて、特徴的だが、はっきりとした線引きはできないように思えます。重なり合う部分があるからです。最近、You Tubeで久しぶりに聴いたイギリス人の牧師で有名な説教者であるデレク・プリンスの説明によれば、強いて言えば、賛美は神の偉大さに対して、感謝は神の善（善き業、恵み）に対して、礼拝は神の聖性に対して向けられるものと言うように分けられることができます。また、感謝、賛美は私たちの口から出る「発声、発話」礼拝は主への私たちの「態度、姿勢」（心の）です。旧約、新約聖書を通してこれらは明らかにそうです。

### 賛美・礼拝の所作

主をあがめる所作について見

てみましょう。出エジプト4・

31には「深々と礼をし、主を礼拝した」つまり頭を垂れる、最敬礼をする様子が描かれています。詩143・6「手のひらを上にして手を延ばす。」とあり、それは神から受ける恵みへの期待、待望を示しています。詩95・6「膝を屈める。跪く。」というのも神への畏敬の念の表現です。例えば、レビ9・24「ひれ伏す」とあり、天から降った火で捧げ物が焼き尽くされた神の業を見た人々の神への畏れを表現しています。新約聖書のヨハネの黙示4・9〜10にある天における礼拝でも同様のことが行なわれている様子が書かれています。

### 賛美と音楽、歌

詩33・3には「新しい歌を主に向かって歌い、美しい調べと共に喜びの叫びを上げよ。」詩

145・5、7では「あなた（主

）の輝き、栄光と威光、驚くべき御業の数々をわたしは歌います。」「人々が・救いの御業を喜び歌いますように。」とあり、歌や奏楽をもつて賛美するように勧められています。

新約聖書でも黙14・3の中で「彼らは・新しい歌のたぐいを歌った。この歌は地上から贖われた・者たちのほかは、覚えることができなかつた。」と天上の賛美、礼拝が描かれています。ここにあるように、贖われた私たちは、主に新しい歌を歌うべきです。新しい歌といっても、古い歌は否定されていなくて、心が新しいことが大事なのです。使用する楽器についても、詩150・3、4、5には、角笛、琴、豎琴、太鼓、弦、笛、シンバル（打楽器、管楽器、弦

楽器）が出てきます。

では、賛美は誰がするのでしようか。詩150に「息ある全ての者」とあるように、生きとし生けるものは皆、賛美する者なのです。

### 賛美の流れ

集いの賛美の流れは何を参考に進めたら良いでしょうか。私も長い間、祈りの集いに参加し、カトリック、プロテスタントを問わず、賛美の流れを見てきました。中にはとても上手く賛美を導いて、静かな礼拝に入っていく集いもありましたし、まるでジェットコースターのようにアップダウンを繰り返して、終わったら疲れてしまったこともありました。詩95にあるように、賛美と感謝をして礼拝へ、そして神の御前に立つことが描かれています。つまり神の栄光に輝く臨在の中に立つことがゴールです。集いの流れはまさにこれです。

詩50・23「告白を（別の訳では賛美）をいけにえとしてささげる人はわたし（神）を栄光に

輝かすであろう。道を正す人（賛美の一つの側面）にわたしは神の救いを示そう。」とあります。賛美・感謝 ↓ 栄光 ↓

主の臨在（栄光）の満ち溢れの中に立つという流れの中で、神は、その聖なる臨在の中で、御業をもたらします。つまり、賛美、礼拝は奇跡をもたらすのです。例えば、歴代誌下20・21、22には、ヨシャファト王と民の勝利は神への賛美によってもたらされたことが書かれています。

「主に感謝せよ。その慈しみはとこしえに」

聖書を読みながら、経験からも気づいたことがあります。賛美・感謝の歌をささげる時は、あまり歌詞が難しいものやメロディが複雑なものは避ける方がよいと思います。特に賛美の後半、礼拝に向かう前にはその方が良いです。歌詞の言葉を覚えることや、楽譜を目で追うことに気を取られて、礼拝が妨げられるからです。賛美・感謝をさ

さげて、主の山に登り行くなら、主だけを見て、他のことに気を取られない方がよいと思います。更には、礼拝の歌は、もっと単純なものが良いでしょう。主だけに心、魂、全てを向けることは主との深い交わりに入るためには絶対条件です。

#### 礼拝について

ヨハネ4・23、24においてイエスは霊と真理において父なる神を礼拝する時が来ると述べています。それはどういうことでしょうか。賛美・感謝において私たちの魂が動きます。そして礼拝において、私たちの霊は神の霊と深く結びつくのです。私たちという存在は、「霊、魂、肉体」が結びついて一人の人（一テサ5・23）です。また創世記2・7にある人間の創造の様子を見ると、神は土から形作られた人（の肉体）にその鼻に命の息（霊）を吹き入れ、人はこうして人は生きる者（魂を宿す）となったのですから、神と結びつくのは霊においてなのです。

肉体すなわち土は下からのもの、霊（神の命の息）は上からのものであるとデレク・プリンスは説明しています。

#### 真理において

真理には誠実さがあります。偽りがなく、神の前にありのままである状態です。だから神の前に立つ状態とは、神は光ですし、光の中には闇はなく、すべてを照らし出して明らかにするので、隠しようがないのです。神を礼拝する人は神の光の中を歩む人なのです。

ご自分を真理であると言われるタイエスは、人となられた神のみ言葉です。だから集いにおいて礼拝に至る前に、聖書の言葉を読み、できればそれについて短い教えがあると良いでしょう。司祭・助祭や教えのできる人がいないなら、聖書朗読と「毎日の黙想」のコメントなどを用いて、聖書の教えの代わりにすることもできます。

#### 礼拝の要点

礼拝について、パウロによるちょっと驚きのたとえがあります。

す。コリントの信徒への手紙上の6・15、17には「あなたがたは、自分の体がキリストの体の一部だとは知らないのか。キリストの体の一部を娼婦の体の一部としてもよいのか。決してそうではない。娼婦と交わる者はその女と一つの体となる、ということを知らないのですか。「二人は一体となる」と言われています。しかし、主に結び付く者は主と一つの霊となるのです。」

パウロは人の肉体的関係を用いて、不道徳な関係による結びつきに対して、真の礼拝は人間の霊と神の霊とのまったき結びつき、「主と一つの霊となる」なのだと言っています。この点で、ミサの感謝の典礼はまさにそれです！ 私たちは、主の御体と御血を受けるから、主と全く一つになる機会なのです。ですから、個人でも、共同体でも、日々の賛美、感謝、礼拝はこれを持するに欠かせない事なのです。

# 石川直樹師による黙想会の報告と 新年度の予定のお知らせ

東京地区 小松多佳子

前年に引き続き、エルサルバドルで司牧されているピラールの聖母宣教会の石川直樹神父様をお招きし（飛行機代金のためには献金くださった皆様に心から感謝します。）日本の6地区（東京、奄美、福岡、名古屋、秋田、熊本）で二〇二四年十月二四日～十一月八日に、各地区の司教様の許可のもと黙想会が行われました。石川神父様はエルサルバドルでは司教様の許可のもと、悪魔祓いを行っておられるエクソシストとして知られ、海外からも招聘されています。

地区によって多少の差はありますが、ゆるしの秘跡、ロザリオの祈り、賛美、講話、ミサ、ご聖体による個人への祝福の祈り、地区によっては按手の祈りがありました。

最初の、東京初台教会の集いでは3日間、毎日五十～六十名の参加者でした。2か所目は奄美の名瀬聖心教会で2日間とも三十名ほどの方々が参加。3か所目の福岡の笹丘教会での1日には、約五十名が参加。遠山満神父様も赴任された長崎から来ていただきました。4か所目は名古屋のみこころセンターで1日。五十数名の参加者でした。5か所目は秋田の土崎教会で2日間三十～四十数名が参加し、黙想会前日の日曜日の午後は聖体奉仕会の聖堂でミサができ、2日間の黙想会ともに秋田のマリア様のご像の前で祈る時間が与えられ感謝でした。6か所目は熊本本の帯山教会の2日間で三十～五十数名の参加者でした。

石川神父様は日本では悪魔祓いをされませんが、ご聖体によ

る祝福の祈りで、大勢の方が聖霊の安息に入りました。東京では歩行器で来られた方が聖霊の安息から立ち上がると、歩行器無しで歩けるようになりとても喜んで帰りました。石川神父様より「今回の黙想会はどこでも祝福があり感謝しています。」とお便りを頂きました。石川神父様のご聖体顕示によるイエスの霊魂が現存を通して、たくさんご霊魂が救われたことに感謝。また皆様のお祈りとご協力にも感謝いたします。

今年は石川神父様の一時帰国時に新しく大阪と札幌が加わり、全国7か所で黙想会が開催されます。

- ①東京…7月4日(金)、7月5日(土)、7月6日(日)、
- ②秋田…7月8日(火)、7月9日(水)、
- ③札幌…7月11日(金)、7月12日(土)、
- ④福岡…7月14日(月)、
- ⑤奄美…7月16日(水)、7月17日(木)、

- ⑥大阪…7月19日(土)、
- ⑦熊本…7月21日(月)、7月22日(火)

また、石川直樹神父ズーム黙想会が来る2月11日(火)祝日の11時～13時に行われます。

問い合わせは小松多佳子へ [takakoma36@gmail.com](mailto:takakoma36@gmail.com) 電話 〇八〇一五五三〇一四五六四(20～30まで)。なお、今までの石川直樹神父Zoom黙想会で視聴できます。DVDとCD(一ツ800円・送料別)のご希望の方は上記問い合わせ先までご連絡ください。



Jubilee 2025 希望の巡礼者



## 日本と台湾のユース・カリスグループの合同黙想会が開かれました。

参加者を代表して ニコル・パールツエンベルグ

昨年9月27日～29日、わが国からユース・カリスグループの5名が台湾の桃園に渡り、当地のユース・カリスグループとの合同黙想会に参加しました。テーマは「キリストへの私たちの心」でした。その集いは、聖テ

レジアの小さな姉妹会センターと修道院で行われましたが、そこは11階建ての大きな建物で、一階には美しい礼拝堂があり、リジューの聖テレーズの像がバラに囲まれて立っていました。

桃園は日本からそれほど離れた場所には感じられませんでしたが、ファミリーマートやその他の日本名のお店も見かけました。台湾チームの皆さんの寛大さとホスピタリティのおかげで、私たちはとてもくつろぐことができました。

通常、黙想会では、重要なことなので、内容や学びに多くの時間を割きますが、今回の黙想会では、講話による学びよりも、

体験に重点が置かれていました。私たちは、互いをより良く知り、神を礼拝し、多くの楽しいアクティビティを一緒に体験することで、交わりと一致を経験しました。

黙想会のメインスピーカーはレイ・パスカル神父（フィリピン出身）で、「交わり（一致）」と「執り成し」についてお話

してくださいました。「交わりは、私たちが最初に経験するものがあり、本から学ぶものではない」というレイ神父の言葉は、まさに現実そのものでした。レイ神父の講話は、交わりと執り成しというテーマに深みと明快さを与えてくれました。私は、このテーマについてはよく知っているつもりでしたが、異なる視点が示されました。

まず第一に、神が家族を通して人間の敬虔や共同体の一員となる方法についてです。「家族」という言葉が脅かされている

世界において、宇宙の王がそこに入り込み、神性を吹き込み、神との出会いの重要な基盤となる場所であることを示しています。家族においても、言葉では表現できない方法で、同様に聖なる三位一体の真実が伝えられています。

イエスが最初になされた奇跡は、カナの婚礼においてでした。つまり、結婚によって家族が始まる場所においてでした。これらの記録はすべて、重要なことを忘れないようにと、聖霊の啓示によって書かれ、記録されたものです。神は洗礼を通して私たちをさらに深く呼び入れ、神の家族である教会に私たちの心を向けるように促します。教会を通して、苦しみの中の愛が示される場所を通して、世界のために執り成し、福音を伝えることができますようにです。

第二に、私たちは執り成しの祈りの力について学び、祈りは

個人的な（パーソナルな）ものでなければ意味がないことを教えられました。私たちのために執り成してくださるイエス・キリスト（ローマの信徒への手紙8・34）を通して、私たちは執り成しの祈りの基本を学び、教会として（使徒言行録12・12）、私たちは周りの人々や世界のために執り成す重要な役割を担っています。

講話の後、グループで分かち合いをしました。私たちの二つのグループにとって、このミーティングは本当に重要な時間であったと全員が感じました。語り合いの後、私たちは台湾の有名な夜市で台湾料理を食べ、台湾文化を体験しました。台湾チームは、パイナップルケーキを自分で作れる有名な菓子博物館にも連れて行ってくれました。これは本当に素晴らしい体験でした。

台湾では、共に食事をし、ケーキを造り、共に神を賛美し、共に祈ることで、真の霊的交わりを体験しました。この交わり

の実が、台湾と日本の祈りの共同体と私たちの教会にもたらされることを楽しみにしています。そして二〇二六年には、台湾ユース・カリスグループを日本に迎え入れたいと考えています。

### 台日合同ユース黙想会 に参加して 澤田久美子

昨年9月について、念願の台日合同黙想会が開催されました。私は二〇二三年から台湾に移住しているため、台湾側から参加させて頂き、とても有意義な3日間を過ごすことができました。例えば、二〇一七年に日本でカリスユースジャパンを立ち上げ、東京に偶然にも移住してきた台湾人の簡さんの協力を得ながら、コーディネートとして、細々と続けてきたのですが、私が台湾に移住することになったタイミングで、その役割からは離れていました。いつも心の中では、祈りながら、いつか台湾と日本のユースが合同で黙想会ができればいいなあ、などと思ってい

たのでした。神様って、本当に不思議で、それが御心になうものであれば、いつか実現してくださるのですね。

現在は台湾で仕事をしているのですが、台湾の歴史や文化、そして台湾人の素の姿に触れるうちに、日本人とは、随分性格が異なるなあと感じることが多いです。台湾人は基本的には、陽気で、細かい事には拘らず、老いも若きも皆で、わいわいと過ごすのが好きです。日本人のように、人に迷惑をかけてはいけない、こうしなければならぬ、こうあるべきという思考ではなく、みんなそれぞれで、違って当たり前、枠からはみ出ても、大して気にしないという気質があるようです。台湾のカトリック教会に毎週日曜日にミサに行っているのですが、その雰囲気も台湾人らしい雰囲気、日本とは様子が異なります。先日は、クリスマスパーティーがあったのですが、なんと神父様も信者さんたちと一緒に、踊頭にサンタの帽子をかぶり、踊

っていました（ちなみに韓国人ですが）。年配の方も赤い服や緑の服を来て、讚美をして踊っていました。小さな子供たちも沢山いて、一緒に笑っていました（写真）こんな風景は私が小学校のころにあったような気がして、とても懐かしい気持ちになりました。実際台湾に居ると、日本の昭和時代を思い出すことが時々あります。

日本と台湾は現在様々な業界で、とても良い友好関係を築いているように思います。カリスユースにおいても、友好関係を続けることによって、お互いの良い所を学びあいながら、共に大きく成長していけるような気がします。なので、これからもこのような合同黙想会が少なくとも1年に1度はあっても良いかなあ、などと思っておりますが、これもきっと、神様の計らいによつては、実現するかもしれないのですね！それも楽しみにしています。